

無視するか、糾弾の姿勢で相対し、相手の話にろくに耳を傾けないことが大半ではなからうか。真生さんには、そういった態度が一点もない。相手を認め、尊重し、きちんと向き合うという姿勢で貫かれている。

本書では、今年二月に投票票された名護市長選のある挿話が紹介されている。選挙期間中の不在者投票所で、反対派が「賛成派の企業ぐるみ選挙を監視する」という名目で、監視活動をしていた。

企業名の書かれた車が止まると「撮れ！」という号令が掛けられてカメラ担当が写真を撮り、車を追い返したという場面だ。

真生さんは言う。反対派に対して「自分たちだけが正しいと思

込んで、自分たちに賛成しない人たちをあまりにも簡単に切り捨ててはいないか」と問い掛ける。さまざまな市民の話聞いて自分との共通点を見出し、そこから対話を始めてきた真生さんだからこそ言える言葉だ。実際、反対運動を担う人たちに「もっと賛成派の話を聞きなよ」と呼び掛けているが、反応はないという。県民が二分される状況が長く続く中、「みんなでもっと話し合おうよ」という真生さんの声は重く響く。

今回の著作は、真生さんの写真家活動の中で八冊目となる。決して多い数字ではない。沖縄芝居の巡業を追った写真集「仲間幸子一行物語（一九九一年）」には一四年が費やされた。自分の中で締め切

りを決めず、納得がいくまで撮り続けるのが真生さんのやり方だったからだ。

本書はページをめくると、人工肛門になった自分自身の姿を写した一枚が目飛び込んでくる。また、最後のページに掲載された写真では、再び人工肛門のお腹をさらけ出した上に、誇らしげな笑顔を浮かべている。

真生さんは二〇〇〇年に腎臓がんを、翌年に直腸がんを患った。「五年以内の生存率は五分五分」と医者から言われているという。人工肛門の写真は初めて見た時、僕は思わず目をそらしてしまった。「写真に生きる」という意味の、真生という名前そのものの生き方、彼女の覚悟を正視することができ

なかった。

抗がん剤の投与を拒否し、いつ死ぬか分からない状況の中の仕事。真生さんは最近、自分の中で「締め切り」を決めるようになった。現実の問題として、明日死ぬかもしれないからだ。

「締め切りまで全力投球して、それが終わったら次のテーマにすぐ取り掛かるさ。そうやって一日、一年を生きていけば一〇〇歳まで生きるかもしれないよ。だって私は大宜味村（世界一の長寿の里）の生まれだからね」

相手を尊重し向き合うことで状況を変えよう、何かを創り出そうとしてきた真生さんの仕事。残された時間で何を撮るのかを知るために、手に取ってほしい一冊だ。

## 『有機農業が国を変えた』

### 小さなキューバの大きな実験

吉田 太郎

リブ海の真珠といわれるキューバ。この小さな島で、再び世界の農業関係者を眩目させる革命が起こっている。それは有機農業による自給という名の環境革命だ。

石油や食料、物資のほとんどを外国に依存する国で、それらが突然途絶したらどうなるか。日本の将来を暗示させる未来絵図が、ソ連崩壊とアメリカの経済封



吉田太郎／著  
コモンズ  
2200円  
ISBN4-906640-54-0

鎖の強化により、キューバでは現実化した。大量の餓死者を出しかねない未曾有の食料危機を打開する非常手段としてラストロ国家評議会議長が取り入れたのが有機農業だ。いまでは大半の農地が有機農業に転換し、農業漬けの近代農業以上の生産をあげている。

その苦闘の一〇年史を農家、官僚、研究者への取材を中心にトレースした。大江正章編集長からの質問の連続になんとか応えた本書は、世界でも前例のない巨大な実験の全貌を農業教育を含め多角的に描き出すことにほぼ成功したと自負している。

(よしだ たろう・日本有機農業研究会)

## 自薦

### 『メダカが田んぼに帰った日』

金丸 弘美

メダカは農村でも姿を消した。農業の使用もあるが、特に農業改善事業による田んぼの整備で冬には乾田化、さらに土でできていた水路がすべてコンクリートに変わり、多くの生物が死滅した。一九九九年、メダカは絶滅の危機にあると「レッドデータブック」に掲載された。ところが、ドジョウやタニシ、カエル、メダカも戻ってくる田んぼが、千葉や茨



金丸弘美／著  
学習研究社  
1200円  
ISBN4-05-401521-2

城など東京近郊にあった。無農薬と無化学肥料で取り組んだ、田を耕さない不耕起栽培、別名を自然耕栽培と呼ぶ稲作である。切り藁の残る水田は、ピオトープ（生き物の暮らす空間）になったのだ。冬場に雑草を抑えるために田に水を入れると、宮城ではガンが、福島ではハクチョウが、千葉ではカモが飛んで来た。

面白さのあまり、本書刊行の後、毎月のように各地の田んぼ見学に通っている。この方法は、佐渡島（新潟）の田でも取り入れられ始め、トキ復活のエサ場になると期待されている。

(かなまる ひろみ・フリーライター)